近世における鹿島信仰の地域的展開
—村上家文書にみる御師の活動を中心に—

鶴　貝　好　子　**Yoshiko TSURUGAI**

鹿島神宮（現茨城県鹿嶋市）における、鹿島信仰が注目されるのは、安政2年（1885）、江戸で大地震が起こった後に版行され人気となった「鯰絵」による。当時の人々は、日本の国土の下に鯰が棲んでおり、鯰が動くことで地震がおこるという国土観や災害観を持っていた。鹿島神宮にある要石（かなめいし）には、鯰（地震）を押さえる力があると信じられていた。さらに、「ゆるぐともよもやぬけじの要石、鹿島の神のあらん限りは」という歌が、16世紀後半には、京都で知られていた。近世に入ってからも、この歌は地震がおこる度に詠まれていた。鹿島神宮に限らず、信仰が全国的に広まっていく一つの要因として考えられるのは、宗教伝道者の御師の存在である。近年、鹿島で活躍をしていた御師の史料がみつかった。民俗学の立場から大津忠男（2004）は、活躍していた御師である村上長太夫の史料をもとに研究を行った。本稿では、歴史地理学の視点から鹿島神宮の御師が住んでいた鹿島の様子、また鹿島御師の檀那場形成過程と周辺地域の状況を一御師の村上長太夫の史料をもとに描きだすことを目的とする。「下総上総東都初穂上り〆高覧」（1860から1871年）と「下総檀家印形帳」（1705年と1708年）を主な史料として考察を進めていく。これらの史料のうち、「下総上総東都初穂上り〆高覧」（1860年）と「下総檀家印形帳」の一部を使用した研究はあるが、本研究ではそれ以外の年次も対象としている。この他に、絵図や日記をもとに鹿島信仰の地域的展開をみていく。

結果として、鹿島信仰には、常に鹿島神宮と各地の人々を繋ぐ宗教伝道者がいた。御師が鹿島神宮から認められる以前にもと鹿島事触（かじまごとふれ）と呼ばれる人々が存在していた。二点目は、鹿島御師が在地である鹿島で、下級神官にもかかわらず通常の神官の二倍の敷地を有していた。さらに、在地である鹿島においては、江戸との情報交換者として重要な役割を担っていた。三点目は、大津忠男も明らかにしたように、村上御師の檀那場は、上総（現千葉県木更津市付近）、下総（現千葉県佐倉市付近）、東都（現東京都日本橋周辺）であった。11年間を見てきても檀那場は大きく変わることはなかった。信仰者が多い場所には一年に二度やってきており、一年の三分の一以上を檀家廻りに費やしていた。四点目は、村上御師は檀那場である地域の宿の再建を手伝っている。さらに、村上御師と記載はないが、村からは鹿島御師のために、宿泊場所や食事の世話まで行ったりしている。鹿島御師は檀那場で影響力をもっていた。

本研究では、一御師の活動をみてきた。鹿島には他にも御師がいるため、それぞれの檀那場をみていく必要がある。御師の活動を詳細に知るためには、御師が記した日記が存在しており、その解読が急がれる。それらをふまえ、鹿島信仰の全国的展開、さらには、近世の日本人の国土観に迫っていきたい。